



2019  
今川義元公  
生誕五百年祭

観光・飲食部会特集

# 戦国駿府の古城めぐり

## 駿府今川館(後に駿府城)

今川範囲は、駿河と遠江の守護のときには遠江の国府である見付(磐田)に守護所を置いていたが、駿河一國の守護になってからは駿河の国府である府中に守護所を置いた。以来、今川氏は230年余にわたって駿府を本拠とし、戦国大名へと転化をとげていった。

駿府今川館は、江戸時代の地誌では所在が不明となっているが、徳川家康が駿府今川館を埋めて、その上に駿府城を築いたと考えられる。1982年の駿府城公園内今川氏遺構調査では、天目茶碗、漆塗り椀、梅花文金板、硯などの破片、庭園跡を発掘。駿府今川館で優雅な生活が送られていたことが証明された。

1568年(永禄11)12月13日、武田信玄は「甲相駿三国同盟」を破棄して、駿府に攻め込んだ。このとき、馬場美濃守信房はすべてを焼き、「火をかけなければ、殿は今川氏の財宝欲しさに今川氏を攻めたと言われますよ」と信玄に諫言している

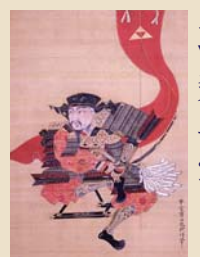
る。武田氏の駿河支配は1582年(天正10)2月21日まで続くが、駿府は重要視されず、江尻城を拠点とした。

駿府が再び脚光を浴びるのは1585年(天正13)、家康が三河遠江・駿河・甲斐・信濃の五カ国支配の拠点として、城を浜松から駿府に移してから。家康は、駿府今川館を拡張し、大天守と小天守からなる天正期駿府城を1589年(天正17)に完成。しかし家康は翌年、秀吉の小田原攻めの先鋒をつとめた後、江戸に移った。

將軍職を秀忠に譲った家康は、城域を本丸二の丸三の丸に拡大する工事を1607年(慶長12)から開始。安倍川の流路変更も行い、大御所政治を行うにふさわしい駿府城下町をつくりあげた。



「東照社縁起絵巻」に描かれた駿府城天守(筆:狩野探幽 所蔵:日光東照宮)



北条早雲 1456~1519

小田原北条氏の初代。伊勢新九郎盛時と称し、入道して早雲庵宗瑞

と号した。若い頃、足利義視方として応仁・文明の乱にまきこまれ、義視が伊勢に逃れたのに従い、その後、姉が嫁いでいた駿河の今川氏を頼って下向し、今川氏親の軍師として活躍。1493年(明応2)に伊豆の堀越公方足利茶々丸を倒し、年貢率を四公六民に引き下げる減税政策、蔓延する風病を治療する福祉政策を実行して比較的短期間で伊豆平定に成功。のちに相模も平定し、北条氏発展の基礎を築いた。



今川氏親 1471~1526

駿河の守護大名今川義忠の嫡男。6歳の時、父が不慮の死をとげ、

家中の内紛で、不遇な少年時代を送るが、17歳の時、叔父・北条早雲の援助を得て、家督を継ぐ。しばらくは早雲の補佐を受けながら遠江への進出に全力をあげ、斯波氏を制圧して二カ国の大名となる。金山経営の大規模化で財源を確保し、検地により従来の荘園制的土地支配から氏親による一元的な土地支配への転換を図り、分国法「今川版名目録」の制定で室町幕府から自立し、戦国大名への脱皮を果たした。



駿府今川館 イラスト:香川元太郎 考証:前田利久 学研歴史群像シリーズ「戦国合戦大全」より

駿府(静岡)は、230年余にわたる今川氏の治世のうち、武田軍によつて焼き払われ、13年間の武田氏の支配を経て、徳川氏の領地となります。このため、今川氏の遺跡の多くは、武田氏や徳川氏による改修が加わっています。そこで今回の観光・飲食部会特集では、2019年の今川義元公生誕五百年祭にむけて、静岡市内の古城をめぐる、そこを舞台に展開された今川氏、武田氏、徳川氏の武将たちの動向を、小和田哲男氏の著作等をもとに紹介します。(文責:企画広報室)